

超次次元ゲイムネプテューヌRe:birth2～黒き魔女の転生記～

佐久間 優

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女神ネプテューヌの願いによつて、本来の姿に戻つたマジエコンヌ。天寿を全うしその人生を終えようとした時、別次元のイストワールが現れて……!?

Re:birth1のマジエコンヌがRe:birth2の世界に転生し、女神、女神候補生と共に犯罪組織と戦うお話。オリジナル設定、ご都合主義などがあります

目次

序章：終焉のプレリュード	
プロローグ	1
第1話 似て非なる世界	4
第2話 帰還、地上へ	10
第3話 忍び寄る影	14
第1章：女神のオラトリオ	
第4話 トラウマ	18
第5話 覚醒	25
第6話 炎の魔神	30
第7話 マジエコンヌの過去	37
第8話 黒き重厚なる大地 ラステイション	43

序章：終焉のプレリュード

プロローグ

「綺麗な…空だな…」

「うん…そう…だね…つ」

隣で私を見守る少女は泣きそうになるのを隠そうとせず、涙目で答える

「お前には…感謝しているぞ…ネプテューヌ、こんな穏やかな最後を迎えて…」

「やだ…つ、マジエコンヌ…死んじやだよつ！もつと一緒に居たいよ！まだまだ教えて欲しい事いっぱいある…つ！」

大粒の涙を拭うのも忘れ、少女…ネプテューヌは叫ぶ。全く…女神とあろうものが情けない

「ネプテューヌ…人はいづれ寿命を迎える…」これは抗えぬ事だ…悲しむなどは言わん…こんな私のために悲しんでくれてありがとう…」「マジエコンヌ…つ」

「ただ…泣き顔ではなく笑顔で送つてくれないか…私が好きなお前の笑顔でな…」

「…」う…かな…？」

涙を拭い、彼女は笑う。太陽のような…私の愛した笑顔で

「ああ…やはりお前は笑顔が一番似合う。泣き顔よりずつとな…これから先、辛いことや悲しいことがあっても…その笑顔だけは忘れるな…約束出来るか？」

「うん…約束する…私、頑張るから…つ」

「それで…良い…さよならだ、ネプテューヌ…」

その言葉を告げ、私は永遠の眠りに就いた

「……筈なんだが、何処だ?ここは」

「気が付くと真っ白な空間に佇んでいた。何故?というか死んだのに意識があるのも可笑しい

「それは…私が呼び寄せたからです」

「お前は……イストワール!?

紛れもなくそこに居たのは私を支えてくれたイストワールだった
…だがどこなく違和感がある

「本当に…イストワールなのか?」

「はい、私は間違いないイストワールです。ですが貴女が知る私とは
少し違います。別次元のイストワールとでも言つておきますね」

そう言つてイストワールは悪戯っぽく笑う。……どうみても私の
世界のイストワールにしか見えんが…

「それはそようと…何故、私を呼んだ?何か理由があるのだろう?」

そう尋ねるとイストワールは真剣な表情をして語り始める

「はい…私達の世界を救う手伝いをして欲しいのです!」

「は……?」

「無責任な事を言つているのは承知しています。でも女神達が捕らえ
られた以上、こうする以外に手立てが無いのです。お願ひします!」

「……事情は分かつた、だがどうして私なんだ?私は…力に溺れて1

度は世界を「滅ぼそうとした…ですよね?」…何故、知つている

「私^{イストワール}達はネットワークで繋がっていて、ある程度の記憶の共有をして

います」

「そうなのか…意外と高性能なのだな」

「む…意外は余計です!…コホン、とにかくそんな貴女だからこそ適
任だと思つたんです」

1つ咳払いをして彼女は続ける

「貴女なら闇に墮ちそうな人に手を差し伸べて救つてくれると思つた
んです」

「…逆に引き込んでしまうかもしれないぞ?」

「それは有り得ません。だって貴女はとても優しい方ですから♪」

「はあ…全く、お前には敵わんな…良いだろう。その願い引き受け

る」

「ありがとうございます。そう言つてくれると思つていました」

心底嬉しそうに微笑むイストワール。やれやれ……いつといい、ネ
プテユーヌといい、もう少し人を疑えと言いたくなるな……まあ、そこ
が良いところでもあるのだが

「さて……名残惜しいですが、そろそろ転送しますね？女神救出部隊を
向かわせるので、合流して下さい」

「ああ……分かった」

「では……また彼方の世界で会いましょう！」

そう言うのと同時に私は光に包まれ、意識が途切れた

一度、失った命、再び女神の為に使えるのならば喜んで差し出そう
……

第1話 似て非なる世界

「ん……此処は？」

目が覚めるとガラクタが積まれた廃墟とも墓場ともとれるような場所に居た

「此処に女神が捕らわれているのか……凄まじい悪意が漂っているな……氣を抜いたら狂いそうだ……」

女神とはいえ、かなり消耗している筈だ……

「さつさと救つてやらねばな……だがその前に……っ！」

“ガキイン！”

「ち……氣付かれた……！」

殺氣を感じ、愛用の槍を後方に振るう。金属がぶつかり合う音がした後、何者かの舌打ちが聞こえた

「やれやれ……いきなり襲われるとはな……」

「コンパ、あいつの氣を引くから先に行つてて！」

「はいです！あいちやん、氣を付けてくださいです！」

「ん……？コンパ……あいちやん？まさか

「ちよつと待て、お前達の名前はアイエフにコンパか？」

「何で犯罪組織マジエコンヌが私達の名前を知つているの？」

別次元での知り合いだと言つても信じないだろうな……というより犯罪組織が私の名前同じとは。何処へ行つても悪役か……まあ良い、ま

ずは誤解を解くのが先か

「そうか、お前達が……私は犯罪組織の者ではない。私は……そうだな“ストレガ”とでも名乗つておこう。お前達と女神を救出してくれとイストワールに依頼された」

自分の名前を偽るのは抵抗があつたが、本名を名乗るとややこしくなるからな……

「協力者……ねえ。こんな所に一人で？逆に怪しいわね」

「疑り深い奴だな……まあ当たり前か。別に信じなくとも良い……私は勝手にやらせてもらうからな」

「ちょ、待ちなさいよ！まだ話は終わつて……！」

「二人とも、今…声がしませんでしたか!？」

「え…?」

“う……”

耳を澄ますと微かに呻き声が聞こえる。捕らわれている女神どうか

「此方か……待つていろネプテューヌ…」

「あ、ちょっと待ちなさいよ！」

声の方へと向かうと、そこにはコードが全身に巻き付き、力を奪われた女神達が居た

「く…惨い事を…はあつ！」

女神達を戒めているコードを切り裂こうとするが、見た目以上に硬く刃が通らない

「くそつ…！」

「う…だ、れ…？」

「ネプテューヌ！待つていろ、今助けてやる…！」

「だ、め…逃げ、て…！」

「何…つ!？」

悪寒が走り、後方へと飛び退く。巨大な戦斧が地面にめり込んでいた

「く…一体何だ…!？」

「フハハハ！獲物だ、久々の獲物だああ！」

暗闇から漆黒の巨人が現れ、私を見つけると狂ったように笑い出す。

「な、なんなのコイツ!？」

追いかけてきた二人もその巨人に驚愕する

「番人、といった所だろう…お前達、女神を救う手はあるのだろう?」

「…有るわ。でもこの状況じやあ」

「ならば此処は私が足止めをする。その隙に女神を救え！」

「分かったわ…行くわよ、コンパ！」

「はいです！」

「何をゴチャゴチャ言つてゐる！さつさと掛かつてこい！早く戦わせろおお!!」

そう叫びながら、なりふり構わず、戦斧を振り回す。少々骨が折れそうだ…だがやるしかないだろう

「焦らずとも私が相手をしてやる」

「貴様が相手か！クハハハ！せいぜい俺を楽しませろおお！」

叫びながら戦斧を振り降ろす巨人。それを回避し槍を突き出し攻撃するも、思い切り弾かれ、後退する

「フハハハ！そんなもの痒いだけだあ！」

「ち…見た目通り硬いな…ファイガ！」

右手に魔力を集中させ、巨大な炎をぶつける

「ぐおおお!?」

直撃を受けよろめく巨人。よし効いて…!?

「クク…ヒヤーッハッハッハッ！そうことなくてはなあ!!」

ダメージを負っているにもかかわらず、笑い出す。く…少々まずいな

「く…あいつらはまだか!?」

アイエフ達に視線を向けると、漸く1人を助けた所だつた

「戦いの最中に余所見をするなああ!!」

“ドゴツッ！”

「しまつ…がはあつ!!」

怒りの声と共に迫つてくる戦斧をぎりぎりでガードするが、勢いを殺しきれず地面へと思い切り叩き付けられる

「終わりか？ならば…死ねええ!!」

「させませんっ！」

突然、響いた声と共に白い影が私を抱え離脱する。

「大丈夫ですか？」

「すまない、助かつたよ。お前は…ネプギアか?」

記憶が正しければネプテューヌの妹の筈だ。

「はい…えつと貴女は?」

「私はストレガ。お前達を救いに来たが、逆に助けられてしまつたな」

「女神…貴様、逃がさんぞ…！」

「ふう、しつこい奴だ。病み上がりだがいけるか？」

「はい！私も一緒に戦います！」

強い意思の籠つた瞳で巨人を睨み付ける。ふ：流石は妹だ。良く似ている

「良い返事だ……だがやつの装甲はかなり硬い…どう突破する？」

「出し惜しみはしません、一気にいきます！マルチプルビームランチャー、オーバードライブ！」

そう宣言したネプギアはオーラを纏い、巨人へと突撃、それを迎え撃とうと戦斧を振り上げる。

「させるかつ：ブリザガ！」

「ぐおつ！？腕が…つ！」

「邪魔はさせん、やれネプギア！」

「はああああ！全力で斬り抜いて…！全力で撃ち抜きます！」

巨人の周りを高速で飛び回り斬撃を連続で浴びせ、距離を取り銃弾を浴びせる。

「これで…終わりですっ…いけええ！」

最大出力の極大のビームが巨人を飲み込み大爆発が起きる

「はあ…はあ…」

「…倒したですか？」

「これで倒せてなかつたら…絶望的だな…！？」

「その程度か…本当にその程度なのかあああ！」

土煙が晴れると、そこにはほぼ無傷の巨人が怒りで荒れ狂つていた。く…本格的に不味いぞ

「全く効いてない…く、アイエフ！コンパ！他の女神達はまだなのか！？」

「今やつてるわよ！だけど全然、目覚める気配が無いのよ！」

く……どうする、このままでは……！

「そんな……私、また負けちゃうの……？」

「気をしつかり保て！諦めるなつ……！」

とはいえ……手段など……そうだ！

「コンパ！そのクリスタルをネプギアに渡せ！」

「ふえ!?はいです！」

「これは……シアクリスタル……！この力を使えばっ！」

「死ねええ！」

「お願い、間に合ってええ!!」

ネプギアの叫びに呼応するようにクリスタルから眩い光が溢れ出し、辺り一帯を包み込む

「ぐあああ!?何だ……この光は……つ。目が！目があああ!!」

「はあつ……はあつ……う……つ」

力を使い果たし、女神化が解けネプギアはその場に倒れ込む……潮時だな

「コンパ、アイエフ……退くぞ。これ以上此処に留まるのは危険だ

「……分かつたわ」

一瞬、悔しそうな表情を見せ了承する。私とて悔しいさ……だがもう出来ることは何もない

「急げ！奴の動きが封じられているうちに！」

氣を失ったネプギアを抱え走り出す。それに続いてコンパやアイエフも撤退する

「貴様等、許さんぞ！目が戻つたらぶつ潰してやる！」

巨人の叫び声を背に受けながら、その場から離脱した……

「どうやら追つてくる様子は無いようね……」

「はあ…ひい…もう動けないですう……」

「…救えたのはこの子だけか。それと」

「割れちゃいましたね、シェアクリスタル……」

ネプギアの手の中の割れたクリスタルを見てコンパが呟く。

「…戻りましょう。ネプギアを休ませなきや。それと…」

一端、言葉を切り、此方を向く。何を言いたいかはだいたい予想は付く

「分かった、私の事も話すとしよう……信じてもらえるか分からぬがな……」

「じゃあ戻りましょう。こんな陰気臭いところさつさと出ましよ」

アイエフの言葉に領き私達は墓場を後にした……

第2話 帰還、地上へ

「アイエフさん！コンパさん！ご無事ですか!?」

教会に着くなり、小さな妖精のような人物が飛んでくる。あれは此方の次元のイストワールか……少し大人びているような感じだな

「はい。でも結局救い出せたのはネプギアだけでした……」

「構いません。一人だけでも救えれば充分です……貴女も無事で何よりです、マジエコンヌ」

「イストワール様、今なんと…？」

「聞き間違えじやなければ、マジエコンヌって聞こえたです」

アイエフとコンパ、それぞれが私に敵意と恐怖の視線を向ける。その様子を見てハツとなるイストワール。やれやれ…

「此方のお前もしつかりしているようで抜けているな」

「うう…すみません」

「まあ、良いさ…こうなった以上、事実を話すとしよう。まず先程も言つたが私に敵意は無い」

「…信じて良いんでしょうか？」

未だに警戒したまま此方を睨み付けるアイエフ

「ああ。もし裏切るような素振りを見せたら、何時でも切り伏せても構わん」

「…分かつたわ。」

「ああ…今はそれで良い、少々長くなるが…構わないか？」

「ええ、構わないわ」

「…」

「では……先ず单刀直入に言おう。私はこの次元の人間ではない」

「それが事実だとして…どうして私達の事を知っていたの？」

「ふむ、私が居た次元もゲームギョウ界だからだ。その次元にもお前達が存在していた……もつともその時は敵対していたがな」

「…」

「その時は、と言つただろうに。そんなに睨むな……まあ良い、私は身

に宿した力に蝕まれ、女神達を亡き者にし世界を滅ぼさんとしていた
……そして女神に敗れ私は消滅する筈だつた……」

「じゃあ、その時にこの次元に来たですか？」

首を傾げてコンパは尋ねる。相変わらずコイツが喋ると気が抜け
るな…

「いや、そうではない。私は天寿を全うしてからこの次元に來た
……話を戻そう。女神達は私が力に固執した理由を知り、全員が
祈つた：私が救われるようになると」

「それって……言い出したのはねぷ子？」

「良く分かつたな…その通りだ」

「やつぱり…あの子はこうと決めたら絶対に曲がらないもの」

呆れたようだが、どこか嬉しそうにアイエフは言う

「ねぶねぶは優しいですからねえ…そんなねぶねぶの事をあいちやん
は大好…ムグムグつ!?」

「よ、余計なことは言わないで！ほら、さつさと続きを話して！」

慌ててコンパの口を塞ぎ、捲し立てるアイエフ。この場にネプ
テュースが居たら間違いなく茶化していただろうな……そんな様子
に苦笑しつつ、話を続ける

「そして祈りは通じて私は元の姿へ戻ることが出来た。命尽きるまで
二度と私のように力に溺れる者が出来ないよう：それとおこがましい
事だが女神達が道を踏み外さないよう見守る事を贖罪として生き
ることを誓つたのだ」

そこで一旦、言葉を切る。二人は眞面目に話を聞いていた

「そして…私は寿命を迎える、眠りに付く所でそこに居るイストワール
に呼ばれたと言うわけだ」

そう言うと二人はイストワールの方へと向く、彼女はただ頷くだけ
だつた。だが一人は納得したのかそれ以上、追求はしなかつた

「そう…まあイストワール様が言うならそんなんでしょうね…一つ良
いかしら？」

「ああ…何だ？」

「あんたの使つていた魔法、見たことないんだけどあれはそつちの次元にしか無い魔法なの？」

「ああ…そうではない。あれは私の次元の古い書物に記されていた、また異なる次元の魔法だ。何故私が使えるのか分からんが」

「…あんた、何者？」

「さあな…まああちらでは魔女と呼ばれていたがな。さて他に聞きたいことはあるか？」

「…無いわ。一応信用するけど、完全に信用した訳じゃ無いからね」

「私は難しい事は分からないです…でもストレガさんが嘘を吐いてるようには見えないです。だから私は信じます。ぎあちゃんも助けてくれたです」

「ありがとう……」

「…皆さん、今日はもう解散しましょう。色々あつてお疲れでしょうから」

「そうね…戻りましょコンパ」

「はいです。ストレガさん、また明日」

礼儀正しくお辞儀をして去つていくアイエフの後を追つて出ていった

「マジエ…ストレガ、貴女はこれからどうします？」

「うむ…この国のギルドは何処だ？」

「ギルドですか？それならば教会を出て直ぐの場所にありますか…」

「そうか、ありがとう」

「何をする気ですか？」

「そんな疑うような目で見るな、クエストをこなしてシェアの回復ついでに体を慣らして来ようと思つてな」

転生して体が慣れていないものもあるのだろうが、上手く立ち回れな

かつた。先の戦闘で痛感した。相手が格上だったのもあるのだろうが……

「そうですか……でしたら一つ頼みたいことがあるのですが、良いですか？」

「構わないが……教祖直々とは余程の事なのか？」

「そう聞き返すと声を潜めて話始める

「最近、バーチャファオレストでモンスターが異常発生しているんです。

その調査を頼みたいのですが」

「ふむ……分かった。次いでにそのモンスターの駆逐もしてこよう

「ありがとうございます……1体1体は弱いのですが、纏まつて来る

と厄介ですので、気を付けて下さいね」

「ああ、ありがとうございます……では行つてくるよ（モンスターの異常発生か……まさかな）」

頭に1つの可能性が浮かんだが、あり得ないと結論付けて歩き出した。……後にこの可能性が当たっていた事を思い知らされることになる

第3話 忍び寄る影

「これは……かなりの数だな」

指定された場所へと辿り着くと、スライヌなどの雑魚モンスターからフエンリルなどの危険種が森の中を蠢いていた

「はあ……安請け合いしたのを今更後悔するよ。先ずはコイツらを片付けねば、調査どころでは無いな……サンダガ！」

右手に電撃を纏いモンスターの群れ目掛け放つ。半分以上が今の1撃で粒子となり消えた

「さて、残りもさっさと片付けるか」

槍を構え、残りの群れの掃討に掛けた

数十分後

「ふう、大分片付いたな……後は」

“グルル……”

残りはこのフエンリル1匹、だが中々に手強い。他の狼型のモンスターとの連携も取れていた……リーダー格だったのだろうか

「まあ……1匹になつた今は関係無いか……はあつ！」

フエンリルへ向けて鋭い突きを放つ。それを後ろに下がり回避し、噛み付こうと牙を剥き出しにし、外れんばかりに口を開き、飛び付いてくる。直撃は免れたが鋭い爪が腕を掠める

「ち……やはり鈍っているな。この程度で苦戦するとは……」

“ガアアアア!!”

「く……先ずは動きを止めねばな……ブリザガ！」

両手に纏った魔力を放つ。冷気が対象を凍りつかせ、動きを止める

「止めだ！ レイニーラトナピュラ！ はあつ！」

拘束から逃れようともがくフエンリルへと連續突きを見舞う。為す術もなく直撃し倒れ、粒子となり消えた

「ふう……やつと片付いたか。やはり力が落ちている……取り戻すには時間が掛かりそうだ」

全盛期であればフレアスター・トルネドで一掃できたものを……まあ、ぼやいても仕方ない

「今は調査が先か……？」

辺りを見渡すと、何かが光っているのが目に入る。どうやら何か落ちているようだ

「……」

その物体を目にし、驚愕する。最悪の可能性が当たっていた事を意味するからだ

「何故……エネミーディスクが此処にある……！」

私が世界の敵だった頃に使っていたディスク型の召喚器が散らばっていたからだつた

「とにかく報告しなければ……！」

落ちている物を2、3枚回収し教会へと急いだ

「あ、お帰りなさい。どうでしたか？」

「イストワール、これは单刀直入に言う。この異常発生は人為的なものだ」

「……どういう事ですか？」

「これを見てくれ……私の次元のイストワールと記憶を共有しているなら分かるだろう？」

「これは……何故こんなものが此処に」

先程のディスクを差し出すと、彼女も驚愕していた。

「私にも分からんが……異常発生の原因は十中八九これがばらまかれていたことだろう」

「そうですね……冒険者や兵士の皆様にも注意を促した方が良いですね」

「そうだな。もし発見した場合は即座に破壊するように伝える。そうすればコピーされた魔物は現れぬ筈だ」

「分かりました、そのように伝えておきます……ありがとうございます、ストレガ」

「なに、気にするな。私とお前の仲だろう？」

「そう言つてくれると助かります」

「さて……流石に疲れた。私も休むとしよう」

「お疲れ様です。客間が空いてますので自由に使つて下さい……案内しますか？」

――

「いや、大丈夫だ。大体あちらの教会と構造は一緒だからな」

「そうですか、ではまた明日」

「ああ、またな」

挨拶を交わして、部屋へと向かつた

「ふう……」

なんなく辿り着いた客間で一息つく。1日で色々な事が有りすぎた……魔力の使いすぎで少し気怠い

「こんな姿を見たらおばさんみたいだつて言うのだろうなアイツは……」

そんな事を思い苦笑する。やはりアイツが居ないこの国は寂しいな……

「必ず救い出す……何があろうと、この命に代えても……な」

このプラネットユーヌの女神に思いを馳せ、決意するのだった

終焉のプレリュード end……next “女神のオラトリオ”

第1章：女神のオラトリオ

第4話 トラウマ

“目が覚めたか？ネプテューヌ”

“…どちら様？”

“ふつ…あはははつ！”

“ねふつ!?初対面の人に思い切り笑われた!?”

“初対面か…先程まで命の取り合いをしていたのに…寂しいことを言うな？ネプテューヌ”

“へ…まさか…マジエコンヌ!?”

“ああ、そうだ。お前達の祈りが奇跡を起こしたんだ”

“そつか…良かつた、私ちやんとやれたんだね”

“ああ…ありがとうな。ネプテューヌ”

“気にしないでよ、私がやりたくてやつた事だし。それに…いーすんに悲しい顔させたくないがつたし。まあみんなのおかげでもあるんだけどね…さて帰ろうか”

“…帰る？何処にだ？”

“みんなの所にだよ！勿論、マジエつちも一緒だよ!”

“…ああ、そうだな”

差し出された手を握り返して私は微笑んだ…

「ん…夢か…」

随分久しい夢を見たな……あの時、消滅する筈だった私を女神達の祈りによつて救われた……ならば次は私が彼女達を救う番だ…ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール。待つてくれ、必ず助けてみせる…

“コンコン”

「誰だ？」

「あ、ストレガさん。起きてたですか？ぎあちゃんが目を覚ましたので来て欲しいつていーすんさんが言っていたです」

「分かった。直ぐに行くと伝えてくれ」

「はいです」

「さて…行くか。アイツにも色々聞きたいことがあるしな…辛い思いをするだろうがな」

教会・執務室

「やつと来たわね。遅いじゃないの」

「すまんな、まだ体が慣れてなくてな」

「お早うございます、ストレガさん…ですか？助けて頂いてありがとうございます」

ネプギアが此方に気付き、礼を言つて頭を下げる。姉とは違つて礼儀正しい子だ…まあ、アイツはアイツなりの感謝のしかたがあるが…

…

「気にするな…私も助けられたのだからおあいこだ」

「そうそう、あんたの事情も話しておいたわ」

「うむ…そうか。説明する手間が省けた。助かる」

「ネプギアさん、起きて早々で申し訳無いのですが…3年前にギョウカイ墓場で何が起きたのか」

「はい……」

ネプギアがゆっくりと重い口を開く。その内容は驚愕の一言で済

まさるものでは無かつた……

「嘘…女神達がたつた一人相手に負けたつていうの？」

「信じられないです…あんなに強い女神さん達が負けるなんて……」

「相手の力量も上だつたのもあるだろうが…一番の原因はシェアだろうな。幾ら女神といえども、力の源が無ければ負けてしまうのは当然だろう…」

「そうですね、それを知りながらネプギアさん達には無謀な戦いを強いてしました……すみませんでした」

「そんな、いーすんさんが謝ることじゃ。それで…あれからゲイムギヨウ界はどうなつちやつたんでしょうか…私達が負けてから3年も経つちやつたんですよ?」

不安な表情でイストワールに問い合わせる。言うべきか悩む一同、やれやれ…変に気を遣うよりは真実を話した方が良い。今が正にそうだ

「事態はかなり深刻だ…犯罪組織の名を知らぬ者はもう居ない…コピーツールやマジエコンの普及率は8割以上、子供も普通に扱つている」

「ちょっと…ストレガ！」

「下手に嘘を吐いたところで氣休めにもならんだろう…街に出れば直ぐに分かることだ。それに無用な優しさは逆に人を傷付けるぞ」

「……つ」

「続けるぞ?人々が犯罪組織を信仰する分、女神の信仰は失われるばかりだ…」

「信仰するべき女神が捕まつてゐるから、仕方ないつていえば仕方無いけどね。救出も失敗したし」

「そして、マジエコンヌの目的は、おそらく犯罪神の復活…このままの状況が続けばそれも時間の問題かと…」

「犯罪神か…私が生み出したユミニテスとは比べ物にならないだろうな。墓守ですら尋常ではない邪氣を放つていたからな…もし復活しようものなら、今のままで滅びを待つしか出来ないな…」

「…もう、どうしようもないんですか？」

あまりに凄惨な世界の状況を聞き、諦めにも似た呟きを溢すネプギア

ア

「諦めるのは早いぞ。策はあるのだろう？ イストワール」

「はい。まだ世界には女神達の妹・女神候補生が居ます」

「私以外にも…女神に妹が？」

「成る程な、候補生達にシェアを集めさせ、犯罪組織の弱体化を図る、という訳か？」

「はい、そしてもう一つ。各国にいるゲイムキャラの協力を仰ぎ、その力を借りるのです」

「ゲイムキャラ？」

疑問符を浮かべ、問い合わせるアイエフ。ふむ…私も聞いたことが無いな

「古の女神達が生み出した世界の秩序と循環を司る存在です。各国の土地に宿り、繁栄をもたらし続けています」

「それで…有事の際には女神に手を貸し、悪を共に滅ぼす…と言つたところか？」

「そんな方達が居たんですか…知らなかつたです」

「ですが、正確な所在は私でも掴めていません。今もプラネットニュースのゲイムキャラの行方を追つてているのですが…」

申し訳なさそうにイストワールは言う。まあ直ぐには見つからんだろうな

「所在が特定したら連絡してくれ。その間にこの国のシェアの回復をしておこう。彼女のリハビリにもなるだろう」

「そうね、3年も捕まつてたんだし、少しほは体を動かさないとね……つて、聞いてるの？ ネプギア」

「え？ あ、はい。聞いてます！」

何か考え方をしていたようだが…まあ大体の予想は付くが…
「ではお願ひします。とこれを渡しておきますね？」
「これは？」

「Nギアです。便利な機能が満載の万能デバイスなんですよ。きっと

冒険の役に立ちます。持つていて損はありませんよ?」

「ありがとうございます」

「じゃあ早速行きましょうか」

アイエフの言葉に同意し、皆が部屋を出た

「という訳でギルドに来たが…」

「1つしかないわね。えーとスライヌ討伐依頼。増殖し凶暴化したスライヌが旅人を襲っている。至急対応せよ…場所はバーチャヤフオレストランね、よし、これくらいなら肩慣らしに丁度良いわね」「出来るかな…私に」

「何言つてるのよ、シャキツとしなさい」

「は、はい。ごめんなさい」

「上手く戦えなくとも気にするな。私達でちゃんとフオローする」

「はい…頑張ってみます」

「よし、では行こうか」

バーチャヤフオレストラン・入口

「あ、居た居た。サクッとやっちゃいましょ」

現地に着いてすぐ大量のスライヌが蠢いていた。むう…ちょっと

気持ち悪いな

“ヌーラー!”

「お前達に恨みは無いが…はあ！」

縄張りを荒らされたと思つたのか、スライヌ達が一斉に此方へ向かってくる。武器を構え迎撃、数を確実に減らしていく

「はあっ！えいっ！」

ふむ……ちゃんと戦えているようだな、これなら大丈夫……む？

“ヌヌ……ヌーラー！”

不意にスライヌ達が一ヶ所に集まりだす。不味い……

“ヌウーラアー！”

「でつかくなつたですか？」

「面倒ね……ネプギア、女神化してパパっとやつつけちゃいなさい、ほらこれもりハビリよ」

「あいちゃん、絶対自分が楽したいだけですう……」

「女神化して戦う……ううつ……ダメ、出来ない……怖いよおつ……」
何かに怯えるように咳き、ネプギアはその場に蹲うずくまつてしまふ。それを好機としたか合体したスライヌ——キングスライヌ——がネプギアを押し潰さんと迫る

「ちつ……ブリザガ！」

“ヌラツ……！”

「碎けろ！竜剣！」

竜の気を纏つた一撃を見舞う。直撃を食らい、粉々に碎け散つた
「大丈夫か？」

「ごめんなさい……私……」

「気にするな。無事ならばそれで良い……ともあれクエストは完了し
た。まずは報告に……」

“ピピピピ！”

電子音がけたたましく鳴り響く。発信源は先程、渡されたNギア

だった

「はい」

『ネプギアさん？ゲームキャラの所在が判明しました。至急向かつて
欲しいのですが』

『本ですか！場所は何処ですか？』

『バーチャヤフオレストの深部にいるようです』

『そうですか。分かりました』

「イストワールか？」

「はい、ゲームキャラがこの森の奥にいるそうです」

「本当に？なら早速行きましょう。報告は後回しよ」

「そうだな。犯罪組織が感付いていないとも限らん」

エネミーディスクが大量に散らばっていた場所でもあるしな……

杞憂であれば良いが……

一抹の不安を抱えながら森の奥へと急いだ……

第5話 覚醒

バー・チャフオレスト・最深部

「この森の何処かにゲイムキヤラが……」

「何処から探せば良いんでしょうか……」

「そうね……これだけ広いとね」

「まあこういうのは奥深くに居るのがお決まりだろう……待て3人共！魔物の様子がおかしい」

目の前の花型の魔物を黒い障気が包み込み黒く染まり、凶暴化する……成る程

「汚染……か」

「ええ……そうよ」

「あの……これは一体」

「モンスターはね、犯罪神の信仰の力をもろに受け易いの」

「見ての通り、あんな風に凶暴化する。場合によつては手も付けられん程にな」

まあ、あの程度ならば問題ないがな

「私達はあれを汚染つて呼んでます」

「強さも段違いだからね。気を付けて」「ファイガ！」

アイエフの言葉が終わる前に豪炎を放つ。魔物を飲み込み焼き尽くす

「ふむ、こんなものか……どうした？」

唖然としたまま動かない3人に問い合わせる。

「汚染したモンスターさんを一撃で……」

「凄い……」

「あんた何者よ……」

三者三様の答えが返ってきた。これくらい普通では無いのか？
「別次元からの転生者だが？」

「そういう意味じゃないわよ……まあ良いわ。先を急ぎましょ」

「そうだな……む？」

「ストレガさん、どうしました？」

「いや……人の気配がしてな」

「は？こんなところに誰が何の為に……まさか！」

「犯罪組織の人間……？」

「だとしたら大変です！」

「ストレガ！何処だか分かる!?」

「ふむ……奥の方から気配がする……こっちだ、付いて来い」

氣配のする方へと駆け出す。間に合うと良いが……！

「此の辺りの筈だが……」

「ねえ、彼処に誰かいるわ！」

アイエフの言葉に振り向くと、鼠色のフードを被つた少女が何かを壊しているように見えた

「貴様、何をしている！」

「ああ？ 誰だテメエら、邪魔すんじやねえよ！」

「それは此方の台詞です！ ゲイムキヤラさんをどうする気ですか!?」

「消すに決まつてんだろ！ こいつは我々マジエコンヌにとつて邪魔らしいからなあ！」

く……どうして私の勘は嫌な方にばかり働くのだろうか

「あんた……犯罪組織の一昧なの？」

「へつ、教えてやる義理はねえが……まあ良い、教えてやるよ！」

そこで一旦、言葉を切り再び口を開く

「犯罪組織マジエコンヌが誇るマジパネ工構成員、リンダ様たあ……構成員？ てことは……下つ端？」

「下つ端ですね」

「下つ端さんです」

「ふむ……下つ端だな」

「なつ……!? 誰が下つ端だ！ 誰が！」

「貴様以外に誰がいる？ 大体、幹部クラスの人間がこんな辺境の森に居るわけ無かるう」

「そういうこと、ほらさつさと退きなさい。下つ端の癖に生意氣よ」「ぐ……貴様ら、下つ端下つ端連呼しやがつて……もう我慢できねえ！」

下つ端呼ばわりしたこと、後悔させてやらあ!!」

手にしていた鉄パイプを振り上げ、目にも止まらぬ速さでネプギアに接近、気付いたときにはネプギアが吹つ飛んでいた

「きやああああ！」

「ネプギア!?」

「おらあ！ 余所見してんじゃねーよ！」

「がはつ……!？」

「あいちゃ……きやあつ!?」

「最後はてめえだ！」

「くつ……ぐあつ!?」

鉄パイプをギリギリで受け止めるも、あり得ないほどの怪力で押し負け吹き飛ぶ。くつ……シェアの加護というのは厄介だな……！

「何だあ？ 散々バカにした割りには随分、呆氣ねーな。さて、そんじや一人ずつぶつ殺してやるか……まずは」

「ひつ……」

邪悪な瞳がネプギアを捉える。まずい、このままでは！

「いや……私、また何も出来ないで……」

「死ねえ！」

『ゴスツ！』

「がはつ……!」

「ストレガさん……!？」

間一髪、ネプギアと下つ端の間に割り込み庇う。防御する暇など無

く直撃を貫ってしまう

「何で……私なんか庇つて……！」

「お前は……この世界を救う希望の光だ……そんなお前を守るのは私の役目だ……」

「でも…私は…」

恐怖に震えるネブギア、そんな彼女を宥めるように頭を撫でる
「恐れるな…お前ならやれる。姉を…ネブテューヌを救うのだろう?
こんなところで立ち止まつての場合は無いだろ?思い出せ…お前
が力を欲したときに…強く想つたことを…」

「私の…想い…」

「おーい、茶番は終わりか?だつたら纏めて死にやがれ…!?

「…それは!皆を…世界を守ること!」

ネブギアが叫ぶと同時に彼女の体がシェアの眩い光が包み込む。
光が収まるとそこには強い意志を瞳に宿し、女神化したネブギアが居
た

「なつ…!?てめえ、女神だつたのか!」

「覚悟して下さい…貴女は私が倒します!」

「ち…やれるもんならやつてみやがれ!」

“ ガキイン! ”

「なつ…!?

全力で降り下ろした鉄パイプを日々と受け止めるネブギア、それに
動搖した下つ端に一瞬の隙が生じる

「私は負けません!ミラージュダンス!」

下つ端を弾き飛ばし、舞うように連続で斬撃を見舞う

「これで決めます!マルチブルビームランチャー!」

「ぎやあー!?覚えてろおー!!」

武器から放たれたビームに飲み込まれ、下つ端は吹つ飛んでいった
……使い古された捨て台詞を吐きながら

「勝てた…私…やれた…そうだつ!ゲイムキャラは…あつ」

呆然とするネブギア。目線の先にはボロボロに壊されたゲイム
キャラだつた物があつた……

「間に合わなかつた……」

“ 大丈夫ですよ、女神候補生”

「えつ?誰…まさかつ!」

声と共に淡い紫の光が現れる。これは……

「お前は…ゲイムキャラか?」

「はい。眠りについている間に破壊されてしまうとは…不覚です」

「大丈夫なのか? 壊されたのだろう?」

「大丈夫、とは言い難いですが…力の一部を逃がすことができました。この力を貴女に託します」

「これが…ゲイムキャラの力…」

「今、この時代で何が起きているのか、眠っていた私には分かりませんが、貴女ならこの力を正しく使ってくれると信じています」

そう言い残し、ゲイムキャラは消えていった…やれやれ

「良くやつたな…ネプギア。上出来だ」

「ストレガさん! 動いて大丈夫なんですか?」

「ああ、あれくらいの打撃など何とも…っ!」

“何ともない” そう続けようとしたが激痛が走る。振り向くと呆れた顔をしたアイエフが背中を突ついていた

「なに強がつてんのよ、真っ赤に腫れてるじやないの」

「ぬう…だからとて突つくな」

「ありがと、ストレガ…ネプギアを守つてくれて」

「気にするな…それが私の役目だ」

「それと…疑つてごめんなさい。あんたを仲間として認めるわ…」

「ありがとう……改めてよろしくな、アイエフ」

「ええ、こちらこそ」

差し出した手をアイエフは握り返し、微笑む

「アイエフさんとストレガさんが仲直りしたことですし、いーすんさんには報告に行きましようか」

「仲直りつて、別に仲違いしてた訳じや……まあいつか、そうしましょ」

無事にゲームキャラの協力を得ることが出来た。反撃への第一歩を踏み出したのだつた…

第6話 炎の魔神

「はい、これで終わりです。あまり無理しないで下さいです」

「すまない：肝に銘じておくよ」

「すみません…私が不甲斐ないばかりに」

「気にするな…勝手にやつたことだ。それに私の負傷のみで済んだのだから良いではないか」

「良くありません、貴女はもう少し自分を大事にしてください」

不機嫌を隠そとせずにイストワールは呟く。あちらのイストワールや四英雄達にも良く叱られていたな…懐かしい

「…善処するよ」

「善処ではなく、遵守してください」

真剣な顔で少々威圧を籠めて、彼女は言う。やれやれ…こちらのイストワールもかなり頑固なようだ

「…分かつた、約束しよう」

こうなつた彼女は絶対に折れないのを知っているので、此方が折れる他ない

「あの…ストレガさん」

「ん？どうしたネプギア」

「お願ひします、私を鍛えて下さい。もつと強くなりたいんです！」

そう言い頭を下げるネプギア。ふむ…どうしたものか

「…強くなりたいのは心か？それとも力か？」

「どちらもです…心だけでも力だけでも本当に守りたいものは守れな
いつて思つたから」

「…良いだろう。但し私は厳しいぞ？」

「はい、よろしくお願ひします！」

元気良く返事をし、頭を下げるネプギア。さてこいつは何処まで強くなるだろうか…

「さて、時間も惜しい…早速始めるとするか」

「へつ！あの…大丈夫なんですか？」

「このくらいの傷、なんて事はない。行くぞ」

「あ、待つて下さい！」

そう言い、教会を出る私の後を慌ててネプギアは追い掛けってきた

バー・チャフオレスト

「ふむ…こなら周りに迷惑は掛からんだろ。さて始めるぞ」

「あの…ストレガさん、本当に大丈夫なんですか？」

「ふ…手負いの状態ならば、充分なハンデになる。さあ掛かって来い

…

「分かりました…行きますっ！」

大地を強く蹴り、真っ直ぐ此方に向かってくる。ふむ…臆せず向
かつてくるのは褒めよう。だが……

「甘い！」

“ガキイン！”

「くうっ…!?」

槍で軽く受け流し、流れるように蹴りを入れる

「どうした？遠慮せず掛かって来い！」

「まだです！ラジカルセイバー！」

高く跳躍し、落下速度を利用した斬り下ろしを放つ……だが易々と
受け止め弾き返す。

「どうした？もう終わりか？なら此方から行くぞ！ヘイスト！」

時を早める魔法を唱えネプギアへと迫り、絶え間なく攻め続ける。
何とか反応し捌き続けるが徐々に押されていき、弾き飛ばされる

「あうっ…!!」

「どうした、その程度で世界など救えぬぞ」

「まだまだ…っ！」

目を閉じ、集中しシェアの光を纏い、女神化する

「ふ…さあ来い！」

「おーおー、面白い事してんな、俺様もまぜろよ！」

「あ…この不快な声は
また貴様か…面倒な奴め。ネプギア…一時中断だ。奴を片付けるぞ」

「はい！」

「けつ！前回は油断してたが今回はコイツがあるからな！」

そう自信満々で言い、懐から数枚のディスクを取り出した……あれは！

「エネミーディスク!? 何故貴様がそれを持っている！」

「ほおー、コイツを知つてんのか?ならこれから何が起きるかも分かるよな！」

「くつ…ネプギア、構えろ！来るぞ！」

「はいっ！」

下つ端がディスクを高く掲げる。禍々しい光を放ち、灼熱の炎が吹き上がり深紅の魔神が姿を現した……コイツは

「見たこと無いモンスター…これは一体」

「イフリート…炎の魔神。過去に私と共に戦った召喚獣だ」

「じゃあ、呼び掛ければ応えてくれるんじや…」

「残念だがそれは無理だ。召喚士が死ぬとその契約は切れる。倒すしかないな」

「そんな…」

まあ、再契約し直すという手もあるが…正気を保つていらない状態では失敗するリスクが高い…！

「どうした?!ビビって声も出ねーか!じゃあそのまま死にやがれ!行け、イフリート!」

“グオオオツ!!”

雄叫びを上げ、拳を振り下ろす。ギリギリまで引き寄せ、後ろに飛び回避する。先程まで居た場所にはクレーターが出来ていた

「チツ…相変わらずの馬鹿力め…ブリザガつ！」

“…つ！”

「そんな…つ」

「ちい…つ！」

魔力で出来た氷塊を飛ばすも片手で止められ、そのまま握り潰される。くつ…魔力が足りん…つ！

「はーつはつはー！その程度かよ！さて、そろそろ止めを刺しちまいな」イフリートが高く飛び上がり、目の前に巨大な火球を作り出す…まずい地獄の火炎か…！

“ガアアアアツ!!”

咆哮の後、力強く拳で火球を叩き付け真っ直ぐ此方に飛んでくる…くそつ！

「ブリザガ！」

自身の槍にブリザガを放ち、冷気を纏わせ火球を受け止める

「ぬううつ…！はああつ！」

ギリギリ打ち消すことが出来たが、槍が燃え尽きる。くう…まずいな

「だつたらもう一度…！おい、なんで動かねーんだよ！」

「当たり前だ…あれほどの大魔法が連續で使える訳が無いだろう」

「ち…役立たずが！」

「…つ！」

役立たず…だと？今、コイツは何て言つた？

「…ふざけるな」

「あ？何か言つたか？」

「ふざけるな！私の戦友（とも）を侮辱することは許さん！」

先程の火球で負った火傷が痛い…体もフラフラだ。だがかつて共に戦った仲間を侮辱されて黙つてなどいられなかつた…アイツは、アイツは…！

“トモ…？…グオ…ウオオオツ!!”

「苦しみました…？」

「ストレガさんつ…あれをつ！」

ネプギアの指差す方へ視線を向けると、角に小さなリングが付いているのが目に入った……なるほどな。

「操りの輪か……ネプギア」

「分かつてます。あの魔神を助けたいんですよ？私が下つ端を引き付けます、その間に！」

そう言うとネプギアは下つ端と戦闘態勢に入つた。

「すまない……待つていろイフリート。今救つてやる！」

痛む体に鞭打ち、立ち上がり真っ直ぐ見つめる

“グウツ…ウオオオツ！”

「がはつ！？」

苦しみから逃れようと暴れまわり、振り回した腕が体に直撃する。

倒れそうになるのを堪え、踏み止まる

「倒れるものか……お前を救うまでは！思い出せ、私だ！契約者にして、唯一の友、マジエコンヌだ！」

“マジエ…コンヌ…ニゲロ…！”

「くつ…誰が逃げるか！他人から疎まれていた私を…初めて受け入れてくれたお前を…見捨てたりしないっ！」

迫り来る拳をギリギリで回避しながら、少しづつ…だが確実に近付いていく

「く…あと少し……届いた！イフリート、今解放してやる！あの時、私を救つてくれたように…今度は私がお前を救つてやる！」

パキイイン！

槍を振り上げ、イフリートを戒めている操りの輪を破壊する。これで洗脳は解ける筈…！

“グウ…全く、相変わらず…無茶をする…おかげで助かつた”

「ふ…無茶をするのはお互い様だ。また…共に戦つてくれないか？」

“ああ…俺でよければな”

「ならば、契約の儀を…」

「ち…させるかよつ！」

再契約を行おうとするが、下つ端が新たなディスクを投げつけ再び魔物を呼び出す。く…つ？

「魔界粧・轟炎！」

地面から突然、炎が吹き上がり魔物を飲み込んだ。一体何が……？

「バーチャファオレストから火柱が見えたから何かと思えばとんでもない事になつてゐるわね……」

「アイエフ…!?」

「さて…状況が良く分かんないけど、何かするならさつさとしなさいストレガ！」

「助かる……どうした？イフリート」

“ストレガとは今のお前の名か？”

「ああ…訳あつて一度死んでからこの世界に転生した……それがどうした？」

“否、相変わらず中二臭いなど思つてな”

「う、うるさい！咄嗟に思い付いたのがそれだつたんだ！そんなことより再契約が先だつ！」

“ふ…そうだな。昔話はそれからだな…”

全く、緊張感の無い奴め…まあ良い。一呼吸置き、魔方陣を展開する

「

「私は魔女ストレガ、汝と契約を望む者…我にその資格はあるか？」

“汝、我が灼熱の炎を受け入れる器なり。お前になら喜んでもう一度力を貸そう”

そう宣言し、イフリートは頷く。さて反撃と行こうか！

「ち…こうなつたらありつたけ使つてやらあ！行けえつ！」

自棄になつた下つ端がディスクを大量にばら蒔く。次々と光り出し魔物の群れが現れる

「ふう…多いな。イフリート、行けるか？」

“甘く見るな…この程度、造作もないわ！”

頼もしく答えると、魔物の群れへ突撃しあつという間に一掃する

「いつ!?嘘だろ!？」

「凄い……」

「本当、あんた何者よストレガ。こんな力を持つた魔神を従えるなんて」

「言つただろ？ただの転生者だとな……さて残りは貴様だけだぞ？」

「ち……此処は逃げるが勝ちだ！覚えてやがれー！！」

またもや捨て台詞を残して下つ端は逃走していくた…ふう、終わつたか

「相変わらずの逃げっぷりね…」

「あはは… ストレガさん、大丈夫ですか？」

「すまん…もう…限界…だ…つ」

「『ストレガ（さん）!!』」

氣力も尽き倒れる。皆の悲鳴に似た叫びを最後に意識は闇に沈んだ…

第7話 マジエコンヌの過去

“ひつく…うえつ…ひぐつ”

“娘よ…何故泣いている?”

声の方を見ると巨大な魔神が不思議そうにわたしを見つめていた。

“みんな…わたしを怖がるの…化け物つて…”

“何故だ?普通の人間にしか見えぬが……”

そう言う魔神に触れ、私の体が光に包まれ魔神と同じ姿になる。そして直ぐに元の体に戻る

“わたしはね…誰かに触れるとその人に変わっちゃうの…だから…パパもママもわたしを捨てたの…つ”

“そうか…だがお前は化け物ではない”

“え…?”

“それは立派な個性ではないか”

“個性…?”

“ああ…お前だけの力だ”

そう言つて目の前の魔神はニカツと笑つた。怖がらず受け入れてくれた…今までみんな怖がつていたのに…

“だから胸を張れ。どうだ羨ましいだろつて自慢してやれ、お前を疎む奴が居たら俺が追い払つてやる。だから元気を出せ!”

“ありがとう…貴方の名前は?”

“俺か?俺は炎の魔神…イフリートだ”

「…つー」

目が覚めると見慣れた客間に居た。今のは夢か…
「あいつと初めて会ったときの…懐かしいな」

あれ以来、忌み嫌っていたあの力を受け入れる事が出来た……
まあ、それはさておき

「倒れたんだつたな……はあイストワールに会いたくないな」

「誰に会いたくないんですか？ マジエコンヌ」

呟いた瞬間、地の底から響いたような声が聞こえた……振り向きたくない。そんな心境を読んでいたかのように、イストワールは私の目の前へと飛んできた

「全く、貴女という人は！ 無茶をするなど言つたばかりだというのに、大怪我をして！ どれほど心配を掛けければ気が済むんですか！」

「すまない…」

「謝るんだつたら約束の1つくらいちゃんと守つてください……つ」
ジツと私を見つめ、イストワールは言った。心の底から案じているのを感じさせる眼差しをしていた

「分かつた。約束は2度と違わないと誓おう。お前の泣き顔は見たくないからな……」

「な…泣いてなんかいません！ 私は今怒っているんですよ！」

顔を真っ赤にして否定するが瞳にはうつすらと涙が溜まっているので説得力は皆無だ

「ふ…相変わらず嘘が下手だな、イストワール」

「私は嘘を吐かない主義ですから」

零れ落ちそうな涙を指で拭い語り掛ける。恥ずかしいのか顔を背け、拗ねたように言葉を紡いだ。そんな彼女を愛しいと思う「それよりイストワール、あれからどれくらい経つたんだ？」

「3日です。全く無理し過ぎですよ」

「そうか…あれから犯罪組織に動きはあつたか？」

「ここ3日間、目立った行動はしていないわ。別な国で活動している仲間からも今のところ大人しいって聞いたわ」

扉が開き、声が聞こえる。アイエフ、コンパ、ネプギアの3人が部屋へと入ってきた

「アイエフ…」

「目が覚めたみたいね。全く急に倒れるんだもの……吃驚したわ」

「すまん…迷惑をかけた」

「まあ良いんだけどね……」

「それにしても3日で殆どの怪我が治るなんて…吃驚したです」

「ストレガさんがあの魔神…イフリートでしたっけ？あんなのを使役していた事の方が吃驚ですけどね。随分親しげだつたけど、どういう関係なんですか？」

「気になるか？」

「え？まあ……はい。でも無理にとは言いませんけど」

「良いだろう…その前に私の能力について知つてもらわないとな…」

「ネプギア、ちょっと姿を借りるぞ？」

「はい……え、姿つて？」

困惑するネプギアに触れ、体が光に包まれる。久しぶりだな…この感覚

「一体何が…え」

「ぎあちゃんが…2人居るです」

「これが私の能力。他人の姿や力を複製し自身の力として使える…言わばコピー能力だな。この力の所為で幼い頃、化け物扱いされてな」

「そんな…ひどいです」

「まあ、普通は気味悪がつて当然よね」

「そうだな、人は自分の理解を越えたものに遭遇した時、大抵は理解より拒絶するからな…。気が付いたら私は孤立していた。友達どころか親にすら見捨てられて途方に暮れて泣いていた。そんな時さ、イフリートに出会ったのは」

“あの時のお前は何かあるとすぐ泣き出したな”

「…イフリート、勝手に出てくるな。そして余計なことは言わなくて良い」

「全くコイツは…デリカシーというもの知らんのか

「まあともかく、その時に私とイフリートは契約を交わした」

“契約内容がまた可愛くてな、確かずつと

側に居て欲しいって……あだだ!?"

「余計な事を喋るのはこの口か!?」

"すまん! もう喋らんから止めてくれ!"

渋々、イフリートの頬を引つ張つていた手を離す。次に余計な事を言つたらどうしてくれようか

「お前は少しプライバシーというものを知れ」

"もう…冷たいな。まあ良い。病み上がりのお前の魔力を消費するのも悪いしな、時に女神候補生よ"

「あ、はい。なんでしょうか」

"意地つ張りで淋しがり屋の愛しい娘を…頼んだぞ"

「な…イフリート!」

そう言い残しイフリートは消えた。最後の最後に余計な事を…

「え? 娘…?」

「誰の事ですか?」

「…私しかいないだろ」

「「えええつ!」」

イストワール以外の3人が驚き、声をあげた。驚き過ぎではないか?

「やはりお前は知っていたか、イストワール」

「ええ、貴女の次元のイストワールとは記憶を共有していますから。まあ最初は驚きました。魔神が人の子を育てたなんて聞いたこと無いですから」

「まあ普通はそうだ。泣いている私を放つては置けなかつたらしい。だからアイツには感謝しているんだ…今こうして『人』として生きていられる事をな…」

「そうだつたんですか…何だか素敵ですね」

「その言葉、イフリートには直接言つたことは?」

「有るわけないだろ…」

「駄目ですよ、感謝の気持ちはちゃんと伝えなきゃいけませんよ」

「だが今更な気もするし…それに」

「それに……なんですか？」

「面と向かって言うのが恥ずかしい……」

「ぶつぶつ」

「……笑うな」

「ごめん、ちよつと安心しちゃつて」

「は……？」

「ちよつと変わった力があるだけで私達と何も変わり無いんだってね」

「……氣味が悪いとは思わなかつたのか？」

内心は嬉しいのだが、素直ではない私はひねくれた言葉を吐いてしまう

「そんな事無いです、凄いなつて思いました。ストレガさんは初対面の私を助けてくれた、そんな人をそんな事くらいで嫌つたりしません」

そんな私に対してネプギアは真っ直ぐ私を見つめ言う：臆面なくそう言えるのはアソツと同じか。流石、姉妹だなん

「イフリートが言つてたように意地つ張りみたいだけどね」

「五月蠅い：放つておけ」

茶化すように言うアイエフの言葉に、顔が熱くなり、顔を背けた……だが嫌な気分では無い。やはり人との繋がりは暖かいな

「ストレガさん」

「どうした、ネプギア」

「あの：迷惑掛けたり、足引つ張つたりするかもしませんけど……これからもよろしくお願ひします！」

私を見つめ真面目な顔でネプギアは言つた。全くどこまでも律儀だな

「ああ、私の方こそよろしくな？ただ……」

「みにやつ！ふあにふるんれふかあ……」

「もう少し肩の力を抜いた方が良いぞ？」

そう言い、ネプギアの両頬を摘まんでいた手を離す。全部とは言わんが少しは姉を見習つた方がいいな

「そうね、あんたはちよつと頑張りすぎるくらいがあるからね……あ、電話だ。もしもし……え？本当に！うん、分かった……気を付けて」「どうしたんですか？」

「ラステイションで下つ端らしき人物を見かけたつた仲間から連絡が入つたの」

「そうか……手遅れになる前にも向かわんとな」

「マジエコンヌ……無茶はしないでとは言いません。どうせまた破られてしましますからね」

「すまん…」

拗ねたように言うイストワール。事実だから反論できん……
「ただ……これだけは必ず約束して下さい。どんなに無茶して傷付いても、必ず此処に……プラネテユースに帰つてくると」「分かつた。決して違わぬと誓おう……必ずお前のもとに帰つてくるよ」

「かならずですよ。では……気を付けて」

「ああ……皆、行くぞ。手遅れになる前にな」

「「はい！（ええ）」」

……
決意を新たに次なる目的地、ラステイションへと目指すのだつた

女神のオラトリオ end : next 第2章 相対のインター^セ
プション ”

第8話 黒き重厚なる大地 ラステイション

「此処がラステイション……うわあ見たこと無い機械がいっぱい。良いなあ、見て回りたいなあ…」

ラステイションの町並みを見渡し、ネプギアが目を輝かせ呟く。ふむ…機械好きなのは此方でも一緒か

「ちょっと此処に来た目的、忘れてない?」

「はっ! そうでした。見てみたいけど…我慢しなくちゃ……うう」

そうは言うもののチラチラと目が泳いでいた。やれやれ…全く「アイエフ、コンパ。ネプギアと町でも回つて来い。その間、この国の情勢を私が調べておく」

「良いんですか!?」

目を輝かせ、私へ詰め寄るネプギア。ぬう…ちょっと吃驚したぞ…「ギアちゃん、嬉しさのあまりに本音が先に出ちゃつてるですう…」

「ちょっとストレガ、そんな事してる場合じや…」

「闇雲に動いても意味が無い。それに激戦が続いたんだ。息抜きでもしてくるといい…とネプギアの奴、もうあんな所に」

「ふえつ!? ギアちゃん、待つですー! 1人で行つたら迷子になっちゃうですよー!」

いつの間にか、遠くへ行つていたネプギアを追い掛けていくコンパ。こういう所を姉に似たようだ…

「全く…今は非常事態だつてのに」

苛立ちを隠さずアイエフは吐き捨てる、ふむ…勘違いであれば良いが

「…アイエフ、お前は何を焦つている? それとも…後悔しているのか? 女神達…いやネプテューヌを救えなかつたことを」

「……つ」

どうやら当たりか…全く

「あの状況でネプギアを救えただけでも上出来だ。仮に無理をして助け出したとして、お前が居なかつたらアイツは喜ぶとでも…」

「分かつてるわよ! だけど私は…女神様を…あの子を救えなかつた自

分が情けなくて…悔しくて…つ

消え入りそうな声で咳き、アイエフは俯いた…全く

「…涙を流し、後悔したとしても諦めるな。1人じゃない、お前には仲間がいる」

「ストレガ…?」

「どんなでかい壁だつて力を合わせれば乗り越えられる……昔のツレの言葉さ、今のお前のように悩んで立ち止まりそうになつた時に言われたよ。1人で何でも背負おうとするな、お前にはネプギアやコンパが居るだろう?」

そう言うと、顔を上げ私を見つめるアイエフ。その瞳からは先程の迷いが消えていた

「ありがと、ちょっと焦りすぎてた…もう少し仲間を頼つてみる…それとストレガ、あんたも仲間でしょ?」

「私もか?」

「当たり前よ、ネプギアを助けてくれた時に言つたでしょ?だから:ちよつとは頼りにしてるから…じゃネプギア達のどこに行くわ。重ねてありがと、ストレガ」

そう言いアイエフもネプギア達の元へと走つていつた。やれやれ本当に手が掛かるな…まあ悪い気はしないが

「さて、私も行くとしようか…」

ラステイション・郊外

「そろそろ良いか…出できたらどうだ?つけていたことくらいお見通しだぞ?」

大きめの声で叫ぶと、茂みの中から人影が現れた。やはりな…この街に入つてから尾けられているのも私を狙つていたのも分かつていた。アイツらを引き離して正解だつたな

「ち・・氣付いてやがつたか」

「やはり貴様か、下つ端。私を追跡するのなら完全に気配を消すくら
いはしなければな」

「下つ端じやねー！ リンダだ！ ふざけやがつて、今日こそぶちのめし
てやる！」

そう叫び、懐から3枚のエネミーディスクを取り出し投げ付ける。

光と共に危険種——エンシエントドラゴン——3体現れる

危険種3体か 少々骨が折れるな……最初からグランマツクア……いかん、アイツの口癖がうつったな。最初から本気で行かせてもらう！魔力解放！

瞳を閉じ、集中し、魔力が体から溢れ出す。同時にローブを体に纏い、大きめの三角帽を被る：あまりこの姿にはなりたくないが、致し方ない

「さあ、手加減なしで行くぞ！」

地面を蹴り、3体のエンシエントドラゴンとの距離を一気に詰め、近くにいた1体目の急所を的確に貫く

ガアアアアツ!?

雄叫びを上げ、光の粒子となつて消え去る。2体目が隙ありと言わんばかりに、巨大な腕を振り下ろす

——ふ……遅い！はああ！

それをかわし 腕へと槍を突き刺す。痛みに悶え 後退する。そこへ3体目がブレスを吐く。遠距離ならば勝てるとも?

甘い！ はあつ！」

大地を蹴り上げ、空高く舞い上がる。真下のドラゴン目掛け槍を放り投げる。咄嗟にガードしようとするがそれより早く槍が体を貫き、消え去る

灼熱の爆炎に包まれ最後の1体も粒子になり、消え去り、同時に私

の姿も元に戻る。む…そ…ういえ…ば下つ端が居ないな…逃げたか
「まあ良い…しかし、少々やり過ぎたかな…」

“少しどころの話で済むか…ちゃんと制御しろ。馬鹿者”

「ぬう…」

イフリートに叱責され、周りを見渡すと所々、地面が抉れており、フレアを放った場所にはクレーターが出来ていた…もう、やはりあまり使わないでおこう

“しかし、魔力開放するときのあの掛け声はなんだ?”

「いやその…ノリというか、なんというか…ああそうだよ、ネプテューヌに影響されたんだ！悪いか！」

“ふ…良いのではないか、恥ずかしがることは無い。お前は昔から格好良い名前付けるのが好きだつたしなあ?”

「イフリート…つ！」

「ストレガサーん！」

「…ネプギアか。どうした？」

反論しようとしたが声が聞こえ、振り向くとネプギア達の姿が見える。平静を装い返事をする。イフリートの奴、いつか締める…
「どうした？じゃないわよ！爆音が聞こえたから慌てて来てみればあんたが居るし」

「何があつたんですか!? 犯罪組織ですか!?!?

「それよりも怪我はないですか!?!?

「落ち着け、話すから少し離れる…」

三者三様に話し、詰め寄る3人に呆れつつ、引き離す

「それで何があつたんですか?」

「なに、下つ端が襲撃してきたから撃退したまでだ…逃げられたがな」

「…下つ端相手にこれは流石にやり過ぎじゃない?」

「むう…それについては反省している。正直、ここまで制御しきれないとは思っていなくてな」

周りを見渡し、苦笑しつつ言うアイエフ……危険種が居たことは黙つておこう

「あんたねえ。まあ良いわ……これからギルドに行こうと思うんだけど」

「ギルド……成る程な、あそこなら人も集まるからな。情報収集には最適だな」

「それにクエストの行き先でゲームキャラが見つかるかもしれないしね」

「そうですね、じゃあ早速行きましょう」

「今度は先を越されないように頑張ります」

全員の意見が一致し、一路ギルドへと向かつた